辞めて考える子どものこと

はるにれの会
河合　聡子

幼稚園の教諭を辞めてから三か月余りが過ぎました。この間、家庭や講演会等の託児所で子どもを預かったり、近所に住んでいる子どもたちと淡いながらも関係を作りつつあります。また、学生の時実習させていただいていた愛育養護学校の家庭指導グループで、再び保育に参加させていただいています。これらの子どもたちと一緒に過ごす中で、感じたことを書きます。

一、泣くことを受け容れる

ベビーシッターのお姉さんとしてMちゃんと、その友だちのAちゃんを預かった夕方のこと。それまで機嫌よく遊んでいるように見えていたMちゃんは、母親が帰宅した途端にぐずり始めました。母親の膝に寝ころび、母親がAちゃんに声をかけると「おかあさんはAちゃんのことばかり心配してるんだから」と泣きながら怒ります。母親は、Mちゃんが怒ることを止めるのではなく、Mちゃんにもいたわりの言葉をかけます。それでも、母親がまたAちゃんに話しかけると、Mちゃんは「Aちゃ

んばっかり」と怒って訴えます。

この日は幼稚園の遠足の日でした。暑くなったので、疲れているのではないか、と心配しながら迎えましたが、満ち足りた顔で帰ってきました。幼稚園から家へ向かう間も、途中でリュックをおろし汗をふいたり、水筒の麦茶を飲み、Aちゃんと楽しそうに笑い合っていました。Mちゃんにとっては、自分の友だちを私に合わせた喜びや、友だちに私を紹介する嬉しさ、そして二人を自分の場所へ迎え入れる誇らしさで心が満ちているようでした。家に着いてからも、遠足の残りのおやつを分け合って食べたり、穏やかに過ごしていました。

私は、Mちゃんの、母親が帰ってからの変わり様に驚いていましたが、すぐに安堵感を覚えました。泣いて、怒って、ぐずることが、その時のMちゃんの真の心持ちを現わしていると感じられたのです。

Mちゃんが泣いて怒っている時、私はAちゃんを自分の膝に寝させながら、一人の女の子の泣き顔を思い浮かべていました。

今年の四月に小学生になったYちゃんが、年中組の時のことです。Yちゃんはどんなことに対しても、善意で解釈しようとする子どもでした。友だちが調子に乗り過ぎて迷惑をかけることがあっても、根気よく相手に話をする姿にも何度も出会いました。そのYちゃんが、男の子にぶつかられて泣いていました。相手の男の子も悪気があったのではないように見えました。私には、Yちゃんは許してあげることができる、という思いが強くありました。それにもかかわらず、Yちゃんの涙はなかなか止まらず、ますます激しく泣き続けます。Yちゃんには三歳年上の姉がいて当時、母親のおなかの中にはYちゃんの弟がいました。五年近く末っ子として家中の愛を一身に受けていたYちゃんにとって、妹か弟が生まれることが、喜びと同時に大きな不安になっていることを、母親と私の間で話していましたので、その不安が激しい泣き方につながっているのだ、と瞬間的に思いました。そして次の瞬間には、赤ちゃんがいてもYちゃんは今まで

と変わりなく家族から大事に思われていることや、私自身がYちゃんを大好きで、それはこれからも変わらないことを伝え励ましていました。弟が生まれてからは、少し混乱があったものの母親に弟の育児のことで注文をつけるくらい優しく気を遣う姉になっていることを知りました。乗り越えられてよかったと思っていましたが、Mちゃんの涙を見た時、Yちゃんの涙を止めてしまったことに気づきました。Yちゃんの泣きたい気持ちを理解し、励ますことはできたかもしれませんが、Yちゃんの気持ちにもっと添ってあげることができたのではないか、という思いがしていました。そして、自分が子どもが泣くことに対して、自動的にマイナスなこととしてとらえてしまいがちなことにも気がつきました。子どもが生き生きすることばかりに気が向いて、泣いている子と出会うと立ち直らせることに力を使っていました。泣くことに、私が耐えられなかったのだとも思います。

泣くことを肯定的に受けとめることができてから、家庭指導グループのK君の涙に出会いました。K君はお弁当箱を自分で持ってきて椅子に座りました。自分から食べよう、という気持ちになって食事を始めようとしていました。ふたをあけた後、自分の肘でお弁当を落としてしまいました。幸いお弁当は無事でしたがK君は泣いて走り回っています。誰に悲しさをぶつけるのでもなく、頼るのでもなく、ひとりでさまよっているように見えました。二人の保育者になぐさめられて再び席につきました。すぐにピーマンを口に入れました。ピーマンを好きなんだ、と見ていると、二、三度かんで吐き出し、また席を立って泣き始めました。少したって、今度は立ったままハンバーグをパクパクと食べました。保育後の話し合いの時、K君が野菜を嫌いなことや、普段通っている幼稚園で頑張っていることを知りました。そして、泣くために来ている、という話も出ました。私も、K君がやらなくてはならないことに自分を無理やり合わせようとしているように思えました。そして、些細だと思えるような事でも泣いてしまうK君が、泣くきっかけを捜し

て、ここぞとばかり背負ってきた不安を時間と場所を越えて実現していることが伝わってきました。泣くことができる場所があってよかったと心から思いました。

泣いている時、その気持ちを理解してもらうことも心強いことでしょう。そして同時に泣かせてもらうことが救いになることがあることを改めて感じさせられました。

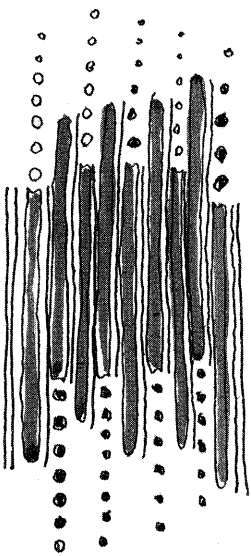
二、子どもたちが創っていく

託児所の保育は全く初めてのことでした。気軽にお引き受けしましたが、当日、指定された場所に向かう電車の中で、どんなおもちゃがあるのか、どんな部屋なのか、など気にかかってきました。完全に身一つで出掛けてしまったので、不安な気持ちも起こってきました。

七人の子どもたちと私に与えられたのは、二十畳足らずの会議室のような部屋と、洗濯カゴよりひと回り大きいかご三つにはいったおもちゃでした。野菜の絵のついた絵合わせ積木、レール、汽車、ぬいぐるみ、小さな買物かご、人形、ボール、トラック等、私には慣れない物がほとんどでした。

とりあえず口型に並べられた机を中央にまとめ、椅子を壁際に並べ、椅子の上におもちゃを置きました。

幼稚園就園前の子どもたちがほとんどで、何となく不安気で母親から離れ難い子もいました。そんな頼り無げ



な場を救ってくれたのは、ひとりの小学生でした。たまたま代休で、妹と一緒についてきてくれたのです。その男の子がどんどんレールをつなぐと、それまで何をしようと困り顔だった男の子たちも汽車に見入り始めました。レールを組み替えたり、途中に障害物を置いたり、私には思いも寄らないことを次々としていきます。本人は決して、まわりの小さな子どもたちを遊ばせようとしているわけではないのに、核になって他の子どもを引き込んでいきました。

細々としたおもちゃより、子どもたちは廊下や階段にいることを望みました。三階から階段で一階まで降りて行き、エレベーターで戻ってくるのは、冒険をしているようでした。その時も、小学生の男の子が隊長になって先頭を行ったり、小さな子を助けてくれたりしました。

おもちゃのはいっていたかごの中にはいり込む子どもがいれば、バスや電車にして押したり引いたりしてくれます。

最初に抱いていた不安も、すぐに消えてしまいとても楽しい時間となりました。この小学生に助けてもらった、という思いで、さようなら、ではなく、ありがとう、と別れました。

講演会の日の託児は、ゆったりできる和室でした。ベビーベッドや板の間もあり楽しいことが起こりそうな部屋でした。保育者は私の他にもう一人、会を主催した側の、子どもを連れた方でした。

午後の会でしたので、降園した幼稚園生が半分以上占めていました。初めは折り紙で遊んでいましたが、ベビーベッドのまわりでままごと遊びが始まりました。隣にいた私は「うん、うん、遊び始めた、よかった　よかった」と思っていると、突然「お歌　歌いましょう」という声がしました。私の期待は一瞬で消え去り、ままごとをやり始めていた子どもたちは「ハーイ」とベビーベッドを飛び降り、さっさと声の主の元へ行ってしまいました。こんなに大人の声（この時は指示のようにも思えた大人の声）に引っ張られ易いことを感じました。

同じ日のことですが、部屋の中ではどうしても収まり

きれず飛び出して行く子について廊下に出ました。なかなか遊びが見つからないようでしたので『だるまさんころんだ』という鬼ごっこを提案しました。私が考えていた『だるまさんころんだ』は、鬼が目を隠しだるまさんころんだ、と十数えるうちに、他の子が鬼に近づき、十数えた後、鬼は皆の方をむいて動いている子を呼んで手をつなぐ、という形式のものでした。参加した四人の子どもたちは同じ幼稚園に通っていて元々顔見知りで、一緒に遊ぶことに抵抗もなく、すぐにジャンケンをし鬼を決めました。その後は、アレレ、という光景が展開しました。だるまさんがころんだ、と鬼が振り返った時も他の子どもたちはどんどん鬼に近づくのです。鬼の方も、動いているのがわかっても友だちをつかまえようとはしません。どうするのか見ていると、鬼のすぐそばまで寄って行き、鬼も友だちがすぐそばで自分を見ていることが楽しいらしく、ゲラゲラ笑い合って一回が終わります。私の考えていたものとは全く違っていましたが、心から楽しんでやっていたのでそのまま一緒に続けました。

どんな場所であっても、どんなおもちゃがあっても、子どもたちは自分たちで遊びを創り出していきます。託児の場では、全く、私の方に方向性が無い所から始まるので、そこで起こることに、私がついていく時間になります。子どもの方でも幼稚園とは違った場で予想のつかない面もあるのでしょうけれど、よく創り出していけるものだと思います。でもやはり、ままごと遊びが、「歌いましょう」で消えてしまったように、大人の支えも、子どもたちの遊びを創り出すエネルギーになり得ることを確認した思いです。

三、子どもを取りまく大人

幼稚園の教諭をしていた時のことを振り返ると、子どもの方から登園し、私を目指してきてくれていた面もあり子どもに囲まれていたということもできます。子どもに囲まれる存在から、今は近所のお姉さんとして、ベビーシッターとして、一度切りかもしれない託児の先生と

して、子どもを取りまく大人の一人になっています。

二歳になったばかりのSちゃんとはお隣り同士で、回覧版を持ってきてくださる時など必ず顔を見せてくれます。昼間も家にいることが多くなった私は、近所の子どもたちが遊んでいる所を通ることが増えました。私が入っていくとSちゃんが手を差し伸ばして私に近寄ってきました。買物の袋に触って何かを確かめているようです。母親に「Sちゃんの好きなものは入っていないわよ」と止められて、私もその場を離れました。家の外でも私を知っている人と認め、安心してかかわりをもっていました。それとは別の日、物置きから自転車を出そうとすると、Sちゃんが近寄ってきて、そばにあった空気入れに手をかけました。私は急ぐ用事ではなかったので、Sちゃんがやりたいだけやれるといい、と思いながら、一緒に空気入れを動かしたり、動かし易いように足で押さえたりしていました。Sちゃんの家の空気入れがその空気入れと同じ型のようで、自分の母親が自転車に空気を入れているのを見ていたのでしょう。何度も繰り返しているSちゃんの横に居続ける間、ゆったりと時間が流れているようで嬉しく見ていました。私だけでなく、Sちゃんの友だちの母親が、Sちゃんと向かい合って過ごしていることもあります。たくさんの大人とのかかわり合いの中で、人に対して安心と信頼を深めていっていることを感じています。

はるにれの会を通じて知り合ったIさんとは家族ぐるみでおつき合いさせていただいていますが、小学校五年生のAちゃん、小学校三年生のT君、年長組のKちゃんの三人の子どもたちは、私のことをちゃん付けで呼びます。Iさんのお宅へ遊びに行くと三人の子どもたちに私が加わり、四人で、ハンカチ落としやその他のゲームをしたり、風船でバレーボールごっこをして、思い切り笑って、Iさんが用意して下さった夕食をいただく、というパターンができていました。末っ子のKちゃんの担任をしていた方とも親しくなりましたし、Aちゃんは、こ

の年齢に特有と思える母親に対する反発とは違った形で一人のモデルとして私を見ているようです。先生でも親でもない自分を、中途半端な立場に居る者ととらえていますが、その中途半端がとても楽しく思えます。私に子どもができたら、Aちゃんも、T君も、Kちゃんも遊んでくれる、と言ってくれていることも嬉しいことです。

隣りに住んでいるSちゃんにとっても、Iさんの三人のお子さんにとっても、平たく言えば私は近所のお姉さんであり、母親の友だちなのですが、幼稚園の教諭という枠にとらわれていた私には、中途半端であることが新鮮なのです。私が初めて自転車に乗れた時、それを見ていてくれたのは、向かい側に住んでいるおばさんでした。私がそれまで練習していたことも知っていてくれたのです。多分、父や母も、私が自転車に乗れるようになったことを喜んでくれた筈ですが、お向かいのおばさんが「乗れたじゃない、よかったね」と言ってくれた言葉だけを覚えています。乗れた瞬間、自分の他にも喜んでくれる人がいたことは、大きな励みとなりました。

自分がいろいろな所で子どもたちとかかわる中で、たくさんの大人が子どもたちのまわりにいることを再認識し、教師でも親でもない私にとっては中途半端と言える存在として子どもたちの横にいられることが、今、とても大切で幸せです。